

46. 大正期の住居

今は建て替えてあっても、子供の頃の家はどうだったかと間取りや使い方を聞いてみる手がある。その中で比較的具体的に聞けた 1 例をまとめてみた。

70 年前に建て替え

図は千里丘東の Y 氏の昔の家である。70 年前というから大正時代、火事があって建て替えたというからさほど古い家ではない。その前の家となると生まれる前でたどれない。

母屋はホンヤといって、瓦葺きの入母屋だった。オモヤという言葉はブンケ（分家）と対の言葉で本家を指すのに使い、建物の母屋はホンヤと呼んでいた。

ツシ・オチマ

大黒柱は 8 寸（24cm）角で、天井裏のツシは燃料のわら入れに使っていた。ツシは入母屋部分全部が使えた。

土間に面した 4 畳は 1 段低くなっていて、オチマ（落間？）と呼んでいた。昔の建物は床が高い。大掃除のときしゃがんで通れるからオチマで 60～70cm、座敷で 1m くらい。

マナカ・コマナカ

間取りの 1 間は 6 尺 6 寸である。その半分の半間をマナカ（真中）、さらに半分をコマナカと呼んだ。

センチは雪隠？

座敷の縁側を突き当たると床の間の裏手にカミ（上）の便所があった。便所のことを日頃はセンチといっていた。蛆虫もセンチ虫である。

センチはセッチン（雪隠）のなまり。雪隠は中国語で、戦国時代頃から民間にひろまった。我々が使うトイレのように、雪隠という上品な外国語が流行ったのである。

ネズミトダナ

デンキ（電気＝電灯）は、はじめは中の間と台所の間ぐらいにつけたのであろう。

土間にはスト（簀戸）のはまったネズミトダナがあり、米のほか餅箱など普段は使わないものを入れていた屋内収納庫である。

ナヤ・ウマヤ

ナヤ（納屋）は農具入れと同時に藁仕事などの作業場でもあった。ムシロバタや縄ない機があった。ナヤのツシも使っていた。藁やフゴなどを入れた。

ウマヤには牛を飼っていた。イナキアシ（稲木脚）も入れていた。

ウマヤの横に、下（しも）の便所があった。

